淨土

一月號

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十一年十二月廿日印刷納本昭和二十二年一月一日發行

第十三卷　第一號

露の身は
こゝかしこにてきえぬとも
心はおなし
はなのうてなそ

（法然上人）

法然上人讃仰會發行

春に生きて

吉田絃二郎

召使ひの女が、故郷の母親の病氣のため俄かに、東北の田舍へ歸つて行つた。飯と味噌汁だけの三日分拵えて置いてくれたので、喰べるだけあたゝめて喰べたので不自由はなかつたが、手足の不自由な私には夜具の出し入れ、雨戸の明け立てが難儀である。幾年振りかで、まつたく孤獨な生活に入つた。つくづく感じたことは、芳野の奥の庵にこもつてゐた西行法師のことである。世捨人になるには健康なからだがなくてはならない。

いつか嵯峨の秋を訪ねたをり、瀧口寺の庵主が、「獨り者のことゝて、病氣の時は四十度の高熱を冒して、水甕まで這つて行きますが、そのやうなをりは、まだ自分の業が滅しないゆゑだと思ひます」と語つた言葉を思ひ出したりした。

自分ひとりで生活してゐることは誰れにも知らせなかつたが、たま〳〵訪ねて來た人たちが、或ひは泊つてくれたり、掃除をしてくれたり、食事を調へてくれたりしてくれる親切に惠まれて何の不自由も感じなかつた。

田舍から還つて來た女は十幾時間も窓硝子もない夜汽車に搖られたためか、高熱を發して寢てしまつた。寒い冬に配給の炭半俵で病室をあたためることは心細い限りである。ところが偶然にも病人が床に就いた日、友人から炭がとゞけられた。神佛の助けといふのはこれであらう。しかしその炭とても長くはつゞかなかつた。二三夜は炭の缺乏を想うて眠れないこともあつた。第二の友人が、これも偶然であつたが炭を運んでくれた。

一切を天に委ねて思ひ煩ふことなき生活のありがたさを、しみ〳〵感じたことであつた。

看病の疲勞といふわけでもあるまいが、朝まだ眠つてゐる間に、玄關の戸を叩かれた。起きて行くとお醫者さまである。私の部屋にはひつて來て、私の寢具を片付けて下さる。それから七輪の火をおこして下さる。「今朝直ぐ病人の血液を檢べて見ませう」といふことであつた。

たま〳〵仙臺から友人が訪ねて來て、これも驚いたらしく、B_1、B_2、Cの注射液をはじめ、病人の好きさうな高價な果物まで揃へて購うてくれ、親切な看護婦までつれて來てくれた。

I先生は風邪で寢てをられたが病人のことを案じて、寒い霜夜にお醫者さまを同伴された。

岡崎病院長は數年振りで九州に歸省されるといふ前夜と、九州から歸られた翌日殺人的な電車に乘つて、わざわざ見舞つて下された。

私はつくづく人の情のうれしさに感泣しないわけにはゆかぬ。

世の中は人のこゝろも荒んだといふ、しかしそれは石を投げこまれた池の面の一部分だけの現象で、靜かな水そのものにはかはりはない。自分たちの周圍の人たちはみんなとても親切である。

病人が苦しみはじめると、凡夫のあさましさ、何うすることもできない身を、せめて神佛にでもすがらうと思ひ家を出かけたことも幾度かある。すると「神佛を敬して神佛に賴らず」といふ宮本武藏の言葉が頭に泛かんで來る。しかし眞實のことをいへば、かういふ場合神佛に賴らずにはをられない。

哲人マアカス・オウレリアスは、哲人の理想として、何ものにも搔きみだされない靜觀の生活を第一義的のものとした。しかもかれは病苦に惱む愛兒の傍に侍した刹那、一切の哲人的靜觀を失つてしまつた。

それでいゝのだ。そのゆゑにこそマアカス・オウレリアスの哲學は尊敬されるのだ。

二ケ月、三ケ月と病人の看護に暮してゐる間に雪も解け、黑い土も柔かになつて來た。もう春だ。病人も日に日にすこしづゝ快くなつてゆく。庭の梅もほころび初めた。しみじみと生きてゐることのありがたさを思ふ。

* * * *

兵戈無用の佛教

文學博士　長井眞琴

―兵戈無用の佛教―

佛教の鎭國文というに『佛所遊履、國邑丘聚、靡不蒙化、天下和順、日月清明、風雨以時、災厲不起、國富民安、兵戈無用、崇德興仁、務修禮讓』とあるが、文中に「兵戈無用」とあるやうに、佛教は本來徹頭徹尾平和の宗教である。

今から十六年前、私がロンドン滯在中に親しくなつた佛教信者であり、日本文化の研究者であるクリスマス・ハンフレーズ氏と、東京裁判の英國側檢事として日本滯在中、幾度ともなく語りあつたのであるが、氏の總裁たるロンドン佛教協會より發行の「佛教十二原理」の中に佛教は平和の宗教と呼ばれている。その理由は未だかつて佛教戰爭の起つた事がなく、又如何なる時代の何人と雖も自己の信仰なり或は信仰表明の故に佛教々團から迫害を受けたことがないからである」と述べ、佛教の特徴としていつも天空海濶的の寛容精神を失わないことを力說している。聖德太子の十七憲法の第一條にも「和合を以て貴と爲し爭ふことなきを宗とす」とあるように、佛教の社會道德の根本は和の信念、和の精神である。和合僧という言葉があるが、これは和合僧伽といつて、團體の理想は和合であるべきを示している。されば破僧とは團體の一致和合を破る行爲であつて、極めて重い罪に數へられている。

やかましい佛教の戒律では、理由なくして出征等を觀に行くこと、理由なしに軍隊內に三日以上宿泊すること、その宿泊中でも演習や閱兵式を觀ること、此等の行爲が禁ぜられている。又支那では法句經と譯されている古い佛典があるが、これを、英國のオクスホード大學のマックス・ミュッラー博士が原典から英譯して「東方聖書」の第十卷に收め、歐米人には珍らしい聖典として歡迎された。續いて佛譯も現れたがこの經の中でも特に歐米の學者の眼を惹いて人口に膾しやされた文句がある。拙譯で紹介すると、

「げにや怨みは怨みもて
熄むることのあるべしや
怨みをすてゝ怨まざる

怨みは遂に消えぬべし
これは古聖の眞理なり」
というのである。佛教では他を怨むという心構えを嫌うのである。それは怨まれる相手よりも怨む心の持主が救われていないからである。他を怨む前に、なぜにかゝる心をいだくに至つたかを反省することが肝要であつて、人は社會に生活して行く上には、忍びがたきを忍んでゆかねばならない。

日本は今や武裝を解除し新憲法の明示する通り、永遠に戰爭の放棄を宣している。されば今後は他國からいかなる侮辱を受けることがあつても、忍びがたきを忍ばねばならぬことになつたのである。然し忍びがたきを忍ぶ心は未だ救われていないのであつて、怨みの心が滅すれば忍ぶというつらい思ひもなくなるのである。この聖句のように、怨みなき心、即ち愛の心、慈悲の心があれば、いかなる場合にも喜んでこれに當ることができるものと信ずる。これこそ心の解放、魂の自由、佛教の理想の解脫というものである。

日本の歷史には戰爭の歷史と文化の歷史との兩面がある。前者は暗黑面、後者は光明面である。暗黑面だけを見れば好戰國民といわれても仕方ないが、光明面のみを見れば平和愛好の國民とも言われるのである。今後祖先のかゝる遺業をついでゆくことが、文化日本、平和日本の國民の務めでなければならぬ。（文責在記者）

人の情

東慈道

春が近づいてひどく寒くなつた今年であつたが、その寒さにいためられたのか、急性肺炎にやられて、二十日ばかり寢こんでしまつた。四十度の熱が十日あまりつゞき、食欲は全くなくて、蜜柑と林ごでやつと命をつなぐ有樣で、熱がやうやく下つた頃は、衰弱しきつて歩くのさへ困難であつた。しかし、醫者が親切な人で、注射液など思ふやうに手にはいらない此頃なのに、よく高價な注射をうつてくれて、思つたより早くなほつた。また、發熱した最初の日には、富山の友人が、お餅やらほし柿などをたんと背負つてやつてきた。年末に餅をついておくからとりに來いと言つてくれてゐたが、汽車の殺人的な混み方に僻易して行かずにゐたのだが、わざ〳〵持つてきてくれたのだ。話したいことはたくさんあるが高熱のため思ふやうに話すことも出來ず、ほんとに失禮してしまつた。親切な醫者の介抱と言ひ、不便な汽車を克服して食料を持つてきてくれた友人と言ひ、なんと溫い心の持主だらう。道義は頽廢した、人の情はなくなつたと歎かれるけふ日に、なんと友情にめぐまれた私であらうか。私は感謝の氣持で一ぱいになつた。多忙な毎日に追はれ、ともすればすさみがちな自己の心を反省して恥しくも思はれたが、靜かに病床に横たはつて人の情を想ひ、自己の心を反省する機會を得たことは、何よりも有難いことだつた。そして佛の慈悲が溫かく私をつゝんでゐるのをしみじみ感じた。

信仰相談

擔當　中村辨康

存在否定と信仰

（問） 淨土の御說明を色々承りましたが、あれでは信仰的な感情を養ふことが出來ず、寧ろ「淨土の實在」がとはれてしまつて、從來の信仰の根底がぐらつくやうに思ひます。もう少し私共のやうな古い頭のものにも納得の出來る御說明が願へないものでせうか。是非お願ひいたします。

（愛知・額田・一老人）

（答） 誠に痛いところを衝いた御質問で恐縮いたしました。あなたの外に事務所の方へもう一人同じやうな感想をよせて來て居るさうです。然しながら信仰と云ふものと、執着と云ふものとは違ひます。若し淨土は實在すると云ふことに依てあなたの信仰がなり立つて居るならば失禮な言ひかたで申譯ございませんが、あなたのは執着心であると云はれても仕方がないでせう。宇宙の根本實在と云ふ考へにスツカリ捉はれて「根本實在が肯定されるところに信仰が成立つ」と思ひ込んで居られるその先入觀念が災ひをして居るのでございます。宇宙の何處に根本實在があるのでせうか。それは要するに抽象觀念に過ぎないのではありませんか。抽象觀念は實在ではありません。それも他の觀念に依てこはれるやうな觀念なら役には立ちません。また唯だ一片の言葉で信仰の根底がぐらつくやうでは正しい信仰でもありません。信仰上の爭ひでは死も亦た辭せずと云ふ程のものであるべきだと思ひます。信仰とは信じ仰ぐことと若しくは仰ぎ信ずることであるから「宇宙の絕對的根本實在」とか或は人智の到底想像し得ない「神秘的存在」でなければならぬと考へたがるのであります。私の如きも始めは隨分それが爲にどんなに惱みに惱みどんなに求めに求めたかも分りません。佛教以外の他の宗教ではそんなことを云つて居りますし、また古い哲學なんかはさうした根本實在の究明に終始して居りましたけれども、そんなことは佛教では許しません。一體「實在」とは一定不變なものであつて動いてはならぬものと考へられて居ります。隨つてともすればさう云ふ風な阿彌陀佛を考へ、さう云ふやうな淨土を考へたがるものでありますが、阿彌陀樣は木佛金佛ではありません。虛無の身、無極の體であり大宇宙に充ち滿ちて居られるのであります。法身佛を「遍一切處」と云ひ報身佛を淨滿と云つて居るのを何と御覽になつて居られますか。要するに如來樣は大生命態であります。天地が無窮の如くに壽命無窮の大生命態であり天地一杯に滿ちて居る大光明態であります。ちつぽけな身體や國土ではありません。お經にも六十萬億那由陀恒河沙由旬と云つて居るではありませんか。由旬とは支那里數の四十里で、その六十萬億倍は貳百四十萬億里ですが、那由陀とは十進法で十二桁目でありますからそれへ十二個の丸をつけねばなりませんが、更に恒河沙とありますか

ら世界最大の大河の砂の數だけまた丸をつけるとすると、果してどれだけの長さになりますでせうか。到底人智ではかり知られませんが、そんな大きさは天地の無限大に等しいものと云はねばなりません。ですから宇宙の何處かの一角の靈佛などと云ふやうなそんな小つぽけなものではありません。

また此の世の中に實在なぞと云ふものは「時間」以外に何處をさがしても一つもありません。時間とは進化であり變化であり推移であり生命であります。だからこそ阿彌陀樣は「無量壽」でましますのです。この無量壽の如來樣、無量壽のお淨土の外に何があると云ふのでせうか。無始の始から無終の未來際をつくして如來樣は生きどほしに生きていらつしやるのです。この外に何の實在を求め何の絶對を求めやうとするのですか。木佛金佛のやうな存在でないからと云つて信仰がぐらつくやうならそんな信仰はぐらついた方が正しくなつたとも云へるでせう。先入觀念に捉らはれないでそしてその先入觀念に執着しないで一心に念佛して御覽なさい。だん〳〵お分りになると思ひます。

今世から後世への問題が分段生死だけを考へたのでは盾の半面であつて兩面を見て居ないからです。精神的な變易生死を是認するとき念佛が、一念に一度の往生であり念々の念佛は念々の往生であるとすれば、そこに信仰生活と云ふものがなければならぬと思ひます。しかも生活があれば場所がなければなりません。即ち阿彌陀樣の世界の中に消息させて頂ける事實がなければなりません。されば往生極樂の問題を後生にばかり限定せずに今世後世を通じて喜んで行ける信仰の事實があるわけでございます。

大體に於て極樂の名は私達の氣持に合はない言葉であります。淨土の方がいゝやうです極樂とは感情的な表現のしかたで、何となく虐げられた民族の要求に應じやうとして居る傾きが見えます。だからいけないのではないでせうか。然るに淨土の名は淨き世界ですから簡單明瞭に納得が行くかと思ひます。譯はわからなくとも何となく感じがよいやうです如何でせうか。

信仰と往生

（問）此間ラジオで中村先生の一枚起請文のお話をきゝ大變感銘いたしました。それに就て率直に自分の考へを申し上げてお聞きしたいことは、念佛の信仰が極樂往生の爲であるとの事でしたが、私達は極樂往生では何ですかピンと來ないのです。私達としては如來樣の大みいのちの中に歸一すればよいのであつて、極樂で樂しまうなどと云ふ氣持は少しもありません。然るに何故に極樂往生をすゝめて居られるのでせうか。その邊のところをお敎へ下さいまし。

（青森・下北・淨土愛讀生）

（答）御質問の氣持は私にもよく分りますが、本當はもう少し御考へになつて見る必樣があるやうに存じますと云ふのは往生と云ふことが唯だ單に「往き生れる」と云ふことで終るのでなくして、そこに「生きゆく」ことが考へられて居るからであります。

會員の頁

毎月、「淨土」の來るのを樂しみに待つています。つまらない雜誌の多い中に「淨土」は頁數こそ少ないがその内容にいたつては、どの雜誌にも負けない堂々たるもので、どの頁をひらいても、心を豐かに深くしてくれる内容ばかりです。毎月有難く拜見しています。中でも、中村先生の信仰相談は、その懇切な解説と、信仰にひきいれずにはおかない熱情にみちあふれて私どもの惱みにとざされた暗い心に明るい燈をともしてくれます。私もおかげさまで、先生の御導きにより信仰生活にはいることができました。苦しみ惱みの多い現在なにものにもたじろがぬたけだけしい心で落着いた生活をおくらしいただけるのも、先生の御導きの結果だと、深く感謝いたしています。

また吉田紘二郎先生の御執筆は「淨土」を一そう光り輝かせています。私見ですが「淨土」に御掲載の先生の玉稿は、他紙へ御執筆のものと異つて、ことさら深みのある力のこもつた先生の魂の告白だと信じています。「淨土」によせられる先生のなみなみならぬ情熱が感じられます。美しいリズムをもつた文章で語られる崇高な宗教的境地は、私どものにごつた心を洗ひ清めてくれます。讀んでゆくうちに先生の清らかな詩情と、けだかい宗教心にうたれて、激しい感激におのゝきます。先生の御健康を祈り、ますます「淨土」に御力添へいたゞきたく切に切にお願ひ申し上げます。

最後に、用紙事情困難な中に毎月發行していかれる御努力に對して萬腔の感謝の意を表しますが、どうか惱みに迷える私どものために、今後も總らゆる苦難を克服して刊行していたゞきたく、心から御願ひいたします。編集の皆様の御健闘を祈つて擱筆します。

（富山縣・中山武夫）

編集室より

◇用紙事情逼迫のため、今號も亦減頁を餘儀なくされました。用紙配給の見透しがつくまで、この頁で發行するより方法がありません。それでも容易ならぬことです。總べてにゆきづまつている日本ですどうか暫くの間、御辛棒下さい。配給事情が好轉すれば直ちに舊に復するつもりです。

◇減頁したので、内容にいたつては一頁もおろそかにしない愼重さを以て編集いたしました。數よりも質の信念で、減頁を内容の充實でカバーいたしました。編集子の意のある所をおくみ願へれば幸甚です。

◇これは私事ですが、この冬の寒さにやられて急性肺炎にかゝり、二十日ばかり寢こんでしまつたため、また發行をおくらしました。恐縮にたえません。（東）

「淨土」一月號
昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和廿一年十二月二十日印刷
昭和二十二年一月一日發行
（定價壹圓六拾錢）
編輯兼發行人　東京都芝區芝公園淨土宗務所　眞野正順
印刷人　東京都神田區神保町三ノ十〇　春山治部左衛門
印刷所　東京都神田區神保町三ノ一〇　共立社印刷所
配給元　東京都神田區淡町路二ノ九　日本出版配給株式會社
發行所　東京都芝區芝公園淨土宗務所　法然上人鑽仰會
振替　東京　八二一八七番
會員番號B　一〇八〇一四
會費一ケ年　金二十圓（送料共）
振替拂込みはすべて三十錢增のこと